クライストチャーチ建設初期における入植記念日の競技会に関する研究

1868年から1877年のポピュラー・スポーツ大会における種目と運営の変容

榎本雅之
Masayuki Enomoto
滋賀大学 経済学部 / 教授

I はじめに

ニュージーランドへの英国による初期の入植は1839年に英国で設立されたニュージーランド会社によって計画された。南島にあるカンタベリー地域への入植は、1850年に英国国教会が組織したカンタベリー協会によって進められた。カンタベリーという名称はカンタベリー大司教に由来し、州都クライストチャーチはカンタベリー協会設立者の一人であるジョン・ロバート・ゴドリー（1814-1861）が学んだオックスフォード大学クライストチャーチ・カレッジにちなんで名付けられた[1)]。クライストチャーチは、1853年から1876年まで、カンタベリー州の行政首都を担った。カンタベリー地域の人口は、1851年に約2,043人、1858年に8,967人、1861年に16,040人、1871年に46,801人、1874年に58,775人と増加し、州都クライストチャーチの人口も1861年に3,205人（男1,598、女1,607）、1871年に12,466人（男6,286、女6,180）、1874年に16,959人（男8,691、女8,268）に増加した[2)]。

カンタベリー協会は、ニュージーランドの他の入植地とは異なる英国国教会を中心とする階層的な英国社会の再現を目指した。具体的には地主、自営農民、そして従順な労働者から成る18世紀のイングランドの社会構造を目指した[3)]。カンタベリーでは、英国の階級制社会をそのまま移植するために高地価政策が採用されたが、その対象はカンタベリー地方の海に面した平野（カンタベリー・ブロック）に限られた。その結果、資本家はブロッ

1）Ministry for Culture and Heritage, New Zealand, 'Canterbury region', https://teara.govt.nz/en/canterbury-region/page-1, 2025年8月24日閲覧。

2）ニュージーランド政府統計（https://www.stats.govt.nz/indicators-and-snapshots/digitised-collections/19th-century-statistical-publications/）2025年9月1日閲覧。

3）Geoffrey Thomas Vincent, 'Sports, and Other Signs of Civilisation' in Colonial Canterbury, 1850-1890, PhD diss., University of Canterbury, 2002, pp. 11-12.

ク外の広大で安価な土地を取得する一方、高額なカンタベリー・ブロック内の土地の独占には慎重だった。その間に、多くの労働者が小規模な土地を購入し、独立した自営農が生まれた。このことは資本家にとっての労働力不足を招き、労働者賃金の上昇をもたらした。さらに、労働者は政治的な発言力を持つようになり、政治が大衆民主主義の方向へと転換していった[4]。沢井は、1850年代の終わり頃にはすでに、英国国教会信徒が数のうえでは優勢であったものの、英国国教会の活動自体は低調であったと述べ、さらに、1862年の行政長選挙において、労働者の味方とされるバプティスト系の候補が当選したことについて、この時点でほぼ階級制植民の構想は閉ざされ、民主的平等社会への志向が定着したと指摘している[5]。

クライストチャーチ建設初期のスポーツについて、19世紀後半のカンタベリー州のスポーツを検討したVincentは、1880年代半ばまでは農村部及び都市部のエリート層や中産階級がスポーツ運営の中心を担っていたことを明らかにしている。一方、労働者階級は1860年代後半から年中行事としての祝祭を通じてスポーツに参加し、1880年以降は、特にボート競技やラグビーといった、正式に組織されたクラブを基盤とするスポーツに参加するようになった[6]。

競技別に見ると、英国の代表的なスポーツであるクリケットは、英国性を象徴する競技としてエリート層の強力な後援によって、ニュージーランドの他の地域に比べて、秩序だった形で、着実に発展した[7]。ボート競技では、賭けレースなどが不定期に開催され、多数の観衆を集める祝祭的な競技会も行われた。1861年にクライストチャーチで設立されたニュージーランドで最も古いボート・クラブであるカンタベリー・ローイング・クラブ（Canterbury Rowing Club）は、入会希望者は既存会員の推薦を受け、総会で選出されなければならないという規約を設けており、排他的・閉鎖的な性格を有していた[8]。

一方、ニュージーランドを代表するスポーツであるラグビーは、この時期のクライストチャーチでは普及しておらず、パブリック・スクールを模したクライスト・カレッジ（Christ College）で、独自のルールによるフットボールが行われていた[9]。陸上競技は、入植初期から、入植記念日やボクシング・デイ、元日などに祝祭としての競技会[10]や友愛会（Friendly Society）主催の競技会が開催された。1868年12月から恒久行事として始まった「ポピュラー・スポーツ大会（Popular Sports）」はクライストチャーチのラティマー・スクウェア（Latimer Square）で開催され、州の人口増加と鉄道網の拡大に伴い1876年には12,000人もの人びとを集める競技会となった。この競技会では、1869年から階級間の社会的（そして物理的な）距離を保つための手段として、入場料1シリングを徴収する特別観覧席が設けられた。このような大規模な競技会は1880年代半ばまで継続した[11]。

以上のように、クライストチャーチでは入植初期から多様なスポーツが行われ、人口増加や鉄道網の拡大といった社会発展に伴い、その組織化が進展した。本稿は、この入植初期におけるス

4）沢井淳弘『ニュージーランド植民の歴史-イギリス帝国史の一環として-』昭和堂、2003年、75頁。

5）同上書、81-83頁。

6）Vincent, op. cit., p. viii.

7）Greg Ryan and Geoff Watson, *Sport and the New Zealanders: A History*, Auckland University Press, 2018, p. 47.

8）Vincent, op. cit., p. 47.

9）Ryan and Watson, op. cit., p. 57.

10）本稿では人々が集まり、様々な運動競技を行う場を「競技会」とし、近代陸上競技種目を行う場を「陸上競技大会」として区別する。なお両者を総称する場合や特に区別する必要のない場合、「大会」と表記する。

11）Vincent, op. cit., pp. 82-92., G. T. Vincent, ‘‘Stupid, Uninteresting and Inhuman’ Pedestrianism in Canterbury, 1860-1885’, *Sporting Tradition*, Vol. 18, No. 1, Australian Society for Sports History, 2001, pp. 43-55.

ポーツの実態を解明するため、入植記念日に開催された「ポピュラー・スポーツ大会」に着目し、その実相を検討する。そもそも、イングランドにおいて人びとの生活で重要な位置を占めていた祝日が、ウェイク（wake）やレヴェル（revel）と呼ばれた教区の年次例祭、守護聖人の祭りであり、これらは晩秋から初夏、あるいは夏の終わりから秋口にかけて開催され、その際に運動競技が行われていたからである[12]。南半球のニュージーランドは英国と季節が逆転しており、12月16日の入植記念日は、英国におけるこれら例祭の開催時期（晩春から初夏）に相当する。ゆえに同競技会は、祝祭とスポーツの結合という点で英国のウェイクと共通の性格を有しており、19世紀の英国人にとってのスポーツ大会がそうであったように、単なる身体活動を超えた英国文化の継承を表象する実践であったと考えられる。さらに19世紀後半の英国では、中産階級の人々が祝祭の競技会を組織化、体系化することによって、近代陸上競技の基礎が形成された[13]。

本稿の目的は、こうした背景を踏まえ、クライストチャーチの入植初期におけるスポーツの変遷の一端を明らかにすることである。本稿では、まず英国における祝祭の運動競技から近代陸上競技への形成過程を概観し、分析の比較軸を提示する。その上で、現地の地方紙である*Press*および*Lyttleton Times*（以下、LT）を史料[14]として用い、1868年から1877年にかけて入植記念日（12月16日）にラティマー・スクウェアで開催されたポピュラー・スポーツ大会について、実施種目と運営体制の変容を検討する。

Ⅱ 祝祭の運動競技から近代的陸上競技へ

2.1. 祝祭の運動競技

中世以降、英国ではフェア（市）やウェイクと運動競技が結びついていた。例えば、1817年、ノーフォーク州ネクトンでは、地元の守護聖人の祭りが定期的な運動競技会として組織されていた。式典は行進で始まり、レスリング、徒競走、鈴取り競技（Jingling match：目隠しして鈴を持っている人を捕まえる）、袋跳び（Jumping in sacks）、目隠し手押し車競走、糸紡ぎ競技、口笛競技、変顔競技（Grinning matches）、跳躍競技が行われた。競技の後には、ダンスも催された。こういった祭礼は、英国の様々な地域で行われたが、付随する競技会は年々減少していく。一方で、1885年にコーンウォールの小都市で開催された競技会のように、競走や跳躍、目隠し手押し車競走、袋競走（sack race）、油を塗った棒登り（a greasy pole）などが継続して行われていた街もある[15]。このような伝統的な祝祭における競技会が、後の自発的な結社（スポーツクラブ）へと受け継がれる文化的な土壌となった。

19世紀半ば以前、スポーツをしたり観戦したりするのは祝日で、スポーツは毎週行われるイベントではなかった。社会の暦は、農業経済の年間リズムによって決定され、多くの祭りは、耕作、収穫、羊の毛刈りといった、農村における一年の様々な段階を示すものとして発展してきた。これらの祭りは、年間サイクルの重要な節目となった。これに重なっていたのは、クリスマス、告解火曜日、四旬節、復活祭、聖霊降臨祭や、個々の聖人の祝日であり、

12）ロバート・W・マーカムソン、川島昭夫・沢辺浩一・中房敏朗・松井良明訳『英国社会の民衆娯楽』、平凡社、1993年、43-46頁。

13）Tony Collins, John Martin, Wray Vamplew ed. *Encyclopedia of Traditional Sports, Routledge*, 2005, pp. 35-36.

14）本研究で用いた史料は、次のとおり。LT：1868年12月17日、1869年12月14、17日、1870年12月19日、1871年12月18日、1872年12月17日、1873年12月17日、1874年12月16、21日、1875年12月17日、1876年12月13、18日、1877年12月15、18日。*Press*：1868年12月21日、1869年1月2日、1870年12月15、17、19日、1871年12月14、18日、1872年12月16、17日、1873年12月17日、1874年12月15、21日、1875年12月10、

これらは一般的に地元の教会の祝祭日となった[16]。伝統的な祝祭である聖霊降臨祭は、1871年に祝日となったことでスポーツ大会、競馬、その他のスポーツにとって、最も重要な祝祭となった[17]。

しかし、農作業の激化と、効率性への要求の高まりに伴う村の社会構造の変化により、労働者とその家族が飲食やダンス、歓談、スポーツを行う農村部の祝祭日は衰退していく。農村生活の合理化は加速し、残っていた共有地が囲い込まれた。1750年から1830年の間に耕作地全体の4分の1以上が共有地から私有地へと転換された。この頃、勤勉という価値観を労働者に押し付ける教化運動が始まった。これらは、仕事の内外における規律の強化、不道徳または無駄とみなされるスポーツの禁止といった形で展開された。特に19世紀半ば以降、労働者階級の余暇から不道徳と放縦を排除し、教育的で道徳心を高める娯楽に置き換えることで、下層階級に「合理的レクリエーション」をもたらし、労働への備えをさせようとする試みが行われた。また、女性のスポーツも制限された。19世紀初頭まで、地方のフェアでは、「スモックレース(賞品がスモックやドレスだったことから、こう呼ばれた)」と呼ばれる競走種目が開催され、女性も積極的に参加していたが、このような種目も見られなくなる。19世紀後半のスポーツ界の男性支配者たちの女性に対する考え方は、女性の体は運動に適していない、過度な運動は生殖器にダメージを与える、スポーツに使われる服装は不道徳、男女混合スポーツは性的誘惑につながるといったもので、女性は筋肉的キリスト教(Muscular Christianity)の担い手とはみなされなかった[18]。

一方、祝祭に付随する競技会以外でも、18世紀末から19世紀初めにかけて、賭けを伴う長距離、或いは、500kmを超えるような超長距離競走が行われた。このような賭けレースが盛んになると、公平性を担保する必要性が生じ、客観的な判定基準として記録の測定が行われるようになる。また、観衆が胴元の下でお金をかける場合、レース展開全体を見ることを要した。そこで、考えられたのが、クリケット場や競馬場を使った短距離走だった。しかし、短距離走の場合、勝つ選手が決まっていることが多く、賭けレースとして成立させるためにスタート方法を工夫した、ハンディキャップが導入された[19]。

2.2. 近代陸上競技の萌芽

1840年代になるとイングランド各地のパブリック・スクールや大学などで陸上競技大会が行われ始め、1850年には、昔ながらの運動競技である競走、跳躍、重量投げの競技会を開催することが、学校で認められるようになっていた[20]。1857年にはケンブリッジ大学で学内陸上競技大会が開催され、1860年にはオックスフォード大学でも陸上競技大会が開催された。パブリック・スクールや大学では、陸上競技を課外活動の一環として取り入れ、学生が自主的に運営を担う中で、学校が道徳や倫理観を養成する教育と結びつけて奨励したことも、生徒たちの競技熱を増大させた。やがて、近隣の学校との連合競技会が開催されるようになると、大会を支援する人々や参加する学生たちが協議し、それまで各校独自で行なっていた競技会ルールが統一されていく[21]。

13、17日、1876年12月18日、1877年12月8、18日。

15) Montague Shearman, *Athletics and Football*, Longmans Green, 1887, pp. 26-29.

16) Collins, et al., op. cit., p. 55.

17) Mike Huggins, *The Victorian and Sport*, Hambledon and London, 2004, pp. 90-91.

18) Tony Collins, *Sport in Capitalist Society A Short History*, Routledge, 2013, pp. 16, 38-39, 41, 63.

19) 岡尾惠市『陸上競技のルーツをさぐる』文理閣、1996年、61頁。

20) Shearman, op. cit., p. 52.

21) 岡尾、前掲書、13-15頁。

1864年3月5日、オックスフォード大学とケンブリッジ大学による第一回の大学対抗戦（the first Oxford v Cambridge Athletic Sports）がオックスフォードのクライストチャーチ・クリケット・グラウンドで開催された。この日行われた種目は100ヤード走、440ヤード走、1マイル走、2マイル障害物走、120ヤード・ハードル走（ハードル数10台、高さは3フィート6インチ、木製のハードルを芝生のグラウンドに直接埋め込む）、200ヤード・ハードル走、走幅跳、走高跳[22]が行われた。この大会は単なる大学対抗戦というだけでなく、近代的な陸上競技の種目構成や規格の原型を提示した歴史的転換点となった。この頃になると、学生時代に競技を経験した卒業生は、自らの健康の維持・増進とともに競技そのものの面白さに魅せられて、自分たちでクラブを組織し、大会を開催するようになった。開催場所として、クリケット場などを借りて行なっていたが、会費などで財政的なゆとりがあったり、大地主や企業家などの会員や後援があるクラブは競技用の土地を購入し、そこで大会を開催するようになる。

1840年から65年にかけて学生やアマチュアの競技が人気を得て、規模が大きくなる。観客は常に勝者がきまっているプロの競技会を敬遠し、誰が勝つか分からないアマチュアの競技に魅力を感じるようになった。その結果、1860年代になるとプロの興行数は急速に減少していった。そのため、プロ選手は、多額の賞金や当時の労働者の数ヶ月分の収入に相当する純銀製の大カップや豪華な景品が主催者から提供されるオープン競技会に参加するようになる。オープン競技会にはアマチュアとプロどちらも参加することができた。また、アマチュアの競技会に身分を偽って参加するプロ選手がいた。さらに、わざと負けて裏金を受け取るプロ選手もおり、競技会の問題となっていた[23]。

1866年初頭、大学やロンドンの元アスリートたちによって、アマチュア・アスレティック・クラブ（Amateur Athletic Club: AAC）が設立された。設立趣意書には、クラブの目的として「アマチュア・アスレティック・スポーツの大会を開催するための既存のグラウンドの不足を補い、あらゆる階層のアマチュア紳士にプロのランナーと混ざることなく、互いに練習し、競い合う機会を可能な限り提供する」ことが記載されていた。同年3月、AACは100ヤード走、440ヤード走、880ヤード走、1マイル走、4マイル走、7マイル走、120ヤード・ハードル走、走高跳、走幅跳、棒高跳、砲丸投（16ポンド）、ハンマー投げの12種目からなる大会を開催した[24]。AACは1867年に規則を公布し、アマチュアを「金銭を目的とした競技に参加したことがなく、生計を立てるためにスポーツを指導または支援したこともない者」と定義し、「または、機械工（mechanic）、職工（artisan）、工場労働者（labourer）でない者」という文言を追加した[25]。最後の文言はボート競技のアマチュア規定に由来したが、ボート競技では職業がそのまま競技での優位性を高めることがあったが、陸上競技ではほとんど正当化できず、翌年削除された。

2.3. 統括組織の設立

アマチュアの陸上競技大会は多くの農村地域や地方の大きな都市で確立されており、1867年には英国内で100近くの大会が開催、翌年には150近くの大会が開催された。当初、AACは陸上界の中心的な役割を担っていたが、ロンドンで市民階級なら誰でも会員になれるロンドン・アスレティッ

22）岡尾はこの時、行われた種目として走幅跳と走高跳としているが、Museum of World Athletics（https://worldathletics.org/heritage/plaque/list/the-varsity-match：2026年3月19日閲覧）では、Long JumpとHigh Jumpと記されており、助走があったのかは不明。

23）岡尾、前掲書、15-17、100-101頁。

24）Shearman, op. cit., pp. 56-57.

25）Derek Birley, *Sport and the Making of Britain*, Manchester University Press, 1993, pp. 276-277.

ク・クラブ（London Athletic Club）が設立されると、その勢力に押され、大会の運営能力や権威が失われた。また、陸上競技が地理的に拡がると、地方ではアマチュア規定に縛られない独自の大会が乱立した。地方の大会をコントロールする力もAACにはなかった。さらに、AACの選手権大会（以下、選手権）は3月のオックスフォードとケンブリッジの両大学対抗戦の後に行われ、学生に有利な日程であった。ロンドンや地方では、陸上競技は夏のスポーツとなっており、選手権の開催日も問題になっていた。

こうした状況を解決するために、1880年4月24日、オックスフォードで英国の有力クラブの代表者が集まり、アマチュアと選手権開催日の問題に関する話し合いが行われた。その結果、選手権は夏にロンドンと地方の輪番で行い、「賞金が賭けられた競技会に出場したことのない人」なら誰でも大会に参加できること、職業による出場制限は一切しないことが満場一致で決議され、正式にアマチュア・アスレティック協会（Amateur Athletic Association :AAA）が発足した。さらに、16ヶ条からなる陸上競技のルールが定められ、同年7月3日にロンドンのリリーブリッジのグラウンドで第一回英国陸上選手権が開催された[26]。

陸上競技大会での種目は、各地で特徴があったが、AAAはこれらの種目と記録の整理に取り組んだ。競走は、100、120、150、200、220、300ヤード、4分の1マイル、600ヤード、2分の1マイル、1,000ヤード、4分の3マイル、1マイル、1マイル半、そして10マイルまでの各マイルとし、その後は15、20、25、30、40、50、75、100マイルとした。ハードル走は120ヤードの平坦な芝生コースに設置された10台のハードルを飛び越える競技とし、高さは地面から3フィート6インチ、ハードルは10ヤード間隔で配置された[27]。ハードル走は、もともとは自然の野原や放牧場を使って走る長距離競走の中で障害物を置いて飛び越すことが行われていたが、学校のグラウンドで行う競技会でも、人工的な柵（ハードル）やフェンスなどの障害物を置き、これを何台も連続して飛び越える競技となった。

跳躍は、興行としてプロ選手によって行われていたが、学校で身体訓練として採用されるようになる。走高跳や走幅跳といった種目は1860年代以降、英国各地の学校の競技会で行われるようになる。両種目は、大学対抗戦やAAC主催の第一回アマチュア選手権で採用された。棒を使った棒高跳や棒幅跳は18世紀ごろから軍事訓練の一つとして採用されていた。棒高跳はアマチュア選手権で採用されたが、棒幅跳は種目として採用されず、この頃から英国での棒幅跳は衰退していく。

投擲は、第二回大学対抗戦で、砲丸投が採用された。この大会では正式なルールが確立されていなかったこともあって、16ポンドの砲丸を片手投げと両手投げの方法で行い、両方の記録を合計して優劣が決められた。この頃の大会では必ずしも砲丸が揃わず、様々な重量の砲丸で競技が行われた。ハンマー投げはスコットランドやアイルランドなど英国の限られた地域の祭典で行われていたが、19世紀後半になってパブリック・スクールや大学の競技会の種目に採用されはじめた。1864年の大学対抗戦や1866年のアマチュア選手権でも採用されている。重さは16ポンドが一般的で、柄の長さは競技者によって異なっていたようである。助走は無制限だったが、1875年のアマチュア選手権で助走距離が7フィート（2.13m）以内と定められ、定着する[28]。

26）岡尾、前掲書、19-20頁。Shearman, op. cit., pp. 57-58, 237-239.

27）Shearman, op. cit., p. 210, 228.

28）岡尾、前掲書、99-101、128-130、136-139、149-152、170-172、192-194頁。

AAAは大会の運営についても競技規則に定めた。大会では、委員会を置き、委員会は大会規則に規定されていない全ての事案についての最終決定権を有した。2名以上のジャッジ(Judge)を置き、ジャッジは競技における最終決定権を有するとともに選手を失格とする権限も有す。審判員(Referee)はジャッジの意見の相違が生じた場合に裁定をくだす。2人以上の競技役員(Steward)または競技係(Clerk of the Course)は、選手の呼び出しや識別バッジを配布する。他に、ウォーキングレースのジャッジ、タイムの計測係、スターター、スターターの補助者(Marksman)を配置した。大会に参加する選手は、参加費を支払わなければならないこと、本名でエントリーしなければならないこと、少年のレースでは年齢の証明と以前の競技成績を提出しなければならないこと、ハンディキャップ競技の場合は直近3回の成績を提出しなければならないことを定め、委員会は理由を説明することなく、参加を拒否する権限を持つことが定められた。また、競技者は肩から膝までを覆う衣服を着用しなければならないことも明示された[29)]。

祝祭のスポーツから近代陸上競技の形成過程を概観すると、次のようにまとめることができる。中世以降、英国の運動競技は宗教的な祝祭(ウェイクなど)と密接に結びついていた。競技は目隠し手押し車競走や袋跳びといった娯楽性の高いものが中心で、年に数回の特別な行事として地域社会で親しまれていた。しかし、19世紀半ば以降、社会構造の変化によりこれら伝統的な祝祭は衰退する。一方で、1840年代からパブリック・スクールや大学で競技会が盛んになる。学生たちの自主運営や1864年から始まるオックスフォードとケンブリッジの両大学対抗戦を通じて、それまでバラバラだった競技ルールが体系化された。さらに、各地でのクラブの結成やアマチュア規定をめぐる論争が統括組織であるAAAの設立につながる。AAAの主導により、競走の距離やハードルの高さ、投擲物の重量(16ポンドなど)といった競技規格が厳格に定められた。また、ジャッジ、審判員、スターター、タイム計測係といった運営役職も定義され、近代的な陸上競技のルールや運営体制が確立された。

Ⅲ 1868年から1877年に開催された入植記念日の競技会の実相

3.1. 競技種目について

1868年から1877年に開催された記念日の競技会について、入植記念日である12月16日の前後数日を中心に*Press*とLTの記事を確認した。1868年は記念日の競技会は開催されていないが、1869年以降の競技会の運営担当者が中心となり、1869年1月1日に「ルーラル・スポーツ(Rural Sports)」として、競技会が行われた。この呼称は農村のウェイクを想起させる。本稿では、この競技会を1868年大会として分析対象に含めた。競技会のプログラム広告及び競技会のレポートから開催された種目について、競走種目、跳躍種目、競走・跳躍以外の種目に分類し、各種目の参加者数を記した表1から3を作成した。それぞれの種目について、年齢の制限やアマチュア、ハンディキャップなど、参加の条件も整理した。競技会後の記事で、参加者数が分からなかった競技は不明と記した。競技者数が確定できなかった種目は数字の横にクエスチョンマークを記した。また、競技会のプログラム広告に競技種目が掲載されていたが、参加者数不足などの理由で、実施されない種目もあった。

29) Shearman, op. cit., pp. 207-212.

競走の種目と参加者数の推移をみる（表1）と、100ヤード走は毎年行われた種目で、1869年と1870年に少年を対象としている。この2年間、多くの参加者がみられたが、1871年以降は開催されなかった。また、1870年から1872年には参加者をアマチュアに制限し、開催された。200/220ヤード走（1868から1870年までは200ヤード走、1871年以降は220ヤード走）も毎年行われた種目であるが、1871年以降、対象を14歳以下と16歳以下の少年を対象とし、一般の年齢（以下、一般）の競技は行われていない。440ヤード走も毎年行われた種目であり、1871年から、一般、16歳以下、14歳以下の3つの競技が行われている。以上、短距離走の推移をみると、1871年が転換点であったと考えられる。以降、100ヤード走を大人対象の種目として、200/220ヤード走を少年対象の種目として、440ヤード走は一般、少年それぞれが参加できる種目として運用された。

ハーフマイル走は1871年から導入され、1871年と1872年の競技会では制服姿の志願民兵が銃を携えて行う競走（Volunteer Race in uniform, with arms）として行われた。1873年と1874年はアマチュアのみの参加制限があった。1874年から1876年にかけて5人以下の参加者の競技であったが、種目が取り除かれることなく継続して実施された。1マイル走は、プロ競技者の種目として1870年に導入され、翌年からアマチュアを対象とした種目として1874年まで行われ、1875年以降はハンディキャップレースとして行われた。少年のレースも行われ、1871年から16歳以下、1876年から14歳以下の少年を対象として行われている。1875年以降の3年間は一般と少年の参加者を合わせると30人を超す競技となっている。1マイル以上の距離のレースは、2マイル走が1874年にプロを除外した形式で、翌年からはハンディキャップレースとして行われた。3マイル走は、1871年にアマチュアを対象として行われ、4マイル走は、1872年にプロを除外した形式で、それぞれ1年だけ行われた。

ウォーキング・レースは、2マイルの距離で1871年から行われ、1875年からはハンディキャップレースとなった。また1マイルのレースは、1876年と1877年に行われた。

ハードル走は、1868年から毎年行われた。1868年と1869年は200ヤードで、1870年からは440ヤードに変更された。1876年のハードル走は少年を対象としたレースが開催されたが、距離は不明である。

跳躍の種目と参加者数の推移をみる（表2）と、助走なしの高跳びが毎年行われており、1871年からは走り高跳びが導入され、その後、この二種類の高跳びが毎年行われた。走り幅跳びと3段跳び（Hop, Step, Jump）は1871年に導入され、走り幅跳びは1873年まで行われ、1877年に再度プログラムに加えられた。3段跳びは翌年にも行われ、それぞれ走り幅跳びよりも多い参加者数であったが、その後の競技会では行われていない。棒高跳び（Vaulting with Pole[30]）は、1868年から1875年まで毎年行われた。

競走・跳躍以外の種目と参加者数の推移をみる（表3）と、平行棒（Horizontal Bar、競技の形式は不明）が1868年から1870年まで行われた。1870年はプログラムに掲載されていたが、参加者がいなかったためか、実施されていない。自転車レース（Velocipede Race及びBicycle Race[31]）は、1869年と1870年、1876年と1877年に行われた。目隠し手押し車競走[32]と二人三脚（Three-Legged

30）棒幅跳びの可能性も考えられたが、優勝者の記録が3メートル程度であることから、棒高跳びとした。

31）19世紀後半、自転車の普及した際、その呼び名が変化した。1860年代のVelocipedeはペダルが前輪に直接ついた初期の自転車、1870年代になるとより速く走るために前輪を巨大化させたペニー・ファージングが登場し、この頃からBicycleという言葉が定着し始める。

32）目隠し手押し車競走は一人が車役、もう一人が押し手役としての手押し車のレースが一般に考えられるが、本研究で用いた史料では被表彰者が一人（二人三脚は被表彰者に二人の名前が書かれている）のため、実際に荷車を押す競走と考えられる。

表1.　1868年から1877年に行われた競走種目と参加者数

種目	距離	参加条件	1868	1869	1870	1871	1872	1873	1874	1875	1876	1877
Running	100yards	指定なし	10					15:予選有	不明:予選有	8	不明	15
		Amateur			5	9	11: 予選有					
		Boys		27								
		under 15			20							
	200 or 220 yards	指定なし	16	10								
		Amateur			15							
		under 14				26	5 19:予選有	28:予選有	不明:予選有	24:予選有	21:予選	22
		under 15		不明	12							
		under 16				10		7	7	8	8	7
		over 50										2
	440yards	指定なし	8			15	8	5	10	7	4	8
		All		不明								
		Amateur			12							
		under 14				13	7	8	6	10	14	8
		under 16				不明	5	7	不明	9	6	4
	half mile	指定なし								4	3	10
		Amateur						9	5			
		Handicap						3?				
		Volunteer Race in uniform, with arms				不明	6					
	1 mile	Handicap								14	12	13
		Amateur				9	8	5	3			
		Professional Handicap			4							
		Governor's Race, Handicap					6					
		under 14, height not to exceed 4ft 9in									11	11
		under 16				8	5	6	9	16	9	6
	2 mile	Handicap								5	5	10
		Professional Excepted							4			
	3 mile	Amateur				10						
	4 mile	Professional Excepted					1					
Walking	1 mile	under 17									15	10
	2 mile	指定なし				不明	6	2?	4			
		Handicap								9	不明	11
Hurdle	200	指定なし	4	9								
	440	指定なし			7	6	6	8	8	4	8	7
	不明	under 14									8	
		under 20									4	
		All									4	

*1871年から200yard走が220yard走に変更

Race）は1868年から毎年行われ、ともに1876年のみプログラムから外れたが、翌年、再び行われた。袋競走（Running in Sacks）は、距離や対象年齢、競技形式で仮面着用（masked）のように競技会ごとに違いが見られるが、毎年行われた。卵を使った競走[33]は、1869年から1875年まで行われた。他に、継続しなかった種目として、1868年のロバ競走（Donkey Race）、フープ競走（Hoop Race）、ティルティング（Tilting）、1869年の油を塗った棒登り（Greasy Pole, to be climbed）、1870年と1871年のクウィンティン（Quintain）、があった。これらの種目は祝祭的な競技であり、1876年の競技会では、自転車レースと袋競走のみとなるが、1877年には目隠し手押し車競走と二人三脚が復活している。このように、目隠し手押し車競走、二人三脚、袋競走は参加者が多いとは言えないが、英国のウェイクの競技の名残として、または祝祭性を感じさせる競技としてプログラムに組み込まれていると推測される。

33）卵を乗せたスプーンを持ち、競走する。より難しいバージョンでは、スプーンを歯の間に挟んで競う。Collins, et al., op. cit., p. 105.

表2.　1868年から1877年に行われた跳躍種目と参加者数

種目			参加条件	1868	1869	1870	1871	1872	1873	1874	1875	1876	1877
Standing				4	6	4	8	4	3	4	4	9	8
Running	High	Leap / Jump					9	3	7	不明	2	6	4?
			under 15	0									
Running	Long	Jump					5	4	6				3
Hop, Step, and Jump							9	8					
Vaulting with Pole				6	5	6	9	7	5	5	4		

表3.　1868年から1877年に行われた競走・跳躍以外の種目と参加者数

種目	距離	参加条件	1868	1869	1870	1871	1872	1873	1874	1875	1876	1877
Horizontal Bar			4	4								
		under 15	不明	不明								
		under 17			実施せず							
Velocipede Race				6								
		Handicap			5							
Bicycle Race	3 mile										3?	
	3 mile	Handicap										不明
Donkey Race			未開催									
Hoop Race	100 yards	under 15	7									
Wheelbarrow Race (blind)									5			
	40 yards	under 15	6									
	100 yards			12	5							
	150 yards					6	6	3				不明
	220 yards									4		
Three-Legged Race			5	5								
		Boys		不明								
		under 15	8									
		under 16				不明						
	200 yards				4							
		under 15			4							
	220 yards						4					5
		Boys										6
		under 16						4	3	4		
	440 yards							3	3	2?		
Running in Sacks	80 yards		10									
	150 yards	under 16										11
	200 yards			不明	6	6						
	220 yards	masked					4	5	5	6	4	不明
	220 yards	under 16							不明	28: 予選有	16	
Egg Race		20 yards, and 20 eggs.		12	8							
Egg and Spoon Race	220 yards	by men over 50					0					
		open to all						4	不明	16: 予選有		
Greasy Pole, to be climbed				不明								
Quintain					3	8						
Tilting			15									

3.2. 競技会運営について

記事から競技会運営についてもその変遷を確認することができる。競技会の会長は、1869年までクライストチャーチ市長が務め、1870年以降はカンタベリー州行政長官が務めている。クライストチャーチ市長は1870年以降、競技会の副会長を務めた。幹事(Secretary)は1868年と1869年はG. Gordonが務め、1870年以降はG. GordonとF. C.

Hallが1874年まで務めた。会計責任者（Treasurer）はWynn Williamsが1868年と1870年から1876年まで務めている。このように競技会の要職を同一人物が長期間、あるいは複数年にわたって重任しており、運営の継続性と安定性に寄与していたと考えられる。

その他の役職は1868年から、ジャッジ（Judge）と複数名の競技役員（Stewards）、スターターがおり、1870年から競技係（Clerk of the Course、1876年は役職なし、1877年から再度割り当て）が、1875年からグランド・スタンド担当役員（Stewards of the grand stand）、エントリー管理役員（Stewards for entries、1877年からSecretary for entriesに改称）、ハンディキャッパー（選手のハンディキャップを決定する）、タイムの計測係、ウォーキングレースの審判員（1875年のみ）が割り当てられた。1875年からSecretaryの役職がHonorary Secretaryと改称、また同年、競技役員がなくなり、委員会（Committee）が設置された。1877年は、審判員（Referee）と通信係（Telegraphist）が追加された。このように競技会を重ねるとともに競技運営の役職が、前章で検討した英国におけるAAAの運営モデルと同様の進化を遂げており、植民地社会におけるスポーツ運営の合理化と近代化が、本国とほぼ同時並行的に進んでいたと言える。

Ⅳ まとめにかえて

本稿では、1868年から1877年にかけてラティマー・スクウェアで開催されたカンタベリーの入植記念日に開催されたポピュラー・スポーツ大会の変遷を、実施種目を中心に検討した。その結果、明らかになった点を英国における祝祭の運動競技と近代陸上競技の形成過程と比較する。

競走種目は、短距離種目として100ヤード走、200/220ヤード走、440ヤード走が開催され、1871年以降から100ヤード走を大人対象の種目として、200/220ヤード走を少年対象の種目とし、440ヤード走は一般、少年ともに参加できる競技として運用されていた。中距離種目は1870年に1マイル走が導入され、翌年ハーフマイル走が追加、以降毎年開催された。また、ウォーキング・レースは1871年から毎年導入された。ハードル走は1868年から行われた。1864年の大学対抗戦の競技種目や1866年のAACの選手権の種目と比較すると、これらの大会では、短距離走は100ヤード走と440ヤード走であり、200/220ヤード走は実施されていない。ポピュラー・スポーツ大会で200/220ヤード走を少年対象の種目としたのは、この種目が英国の陸上競技大会（AAC等）における標準種目から外れていたことを考えると、当時の陸上競技界にとって、200/220ヤード走は正式な種目ではなく、そのため少年対象という限定的な運用になったと推測される。1868年の最初の競技会からプログラムにある100ヤード走、440ヤード走、ハードル走は、英国の初期の陸上競技大会でも開催されている共通の種目である。200/220ヤード走を少年対象とし、ウォーキング・レースが導入されるなどした1871年が祝祭的な競技会からより近代的な陸上競技大会を意識した大会への転換の年と考えられる。

跳躍種目は高跳び種目が毎年行われ、1871年からは立高跳びと走り高跳びの二種目が行われた。一方、1865年から行われていた棒高跳びは1876年以降行われていない。これらの種目は、

1864年の大学対抗戦やAACの選手権でも行われている共通の種目である。

競走・跳躍以外の種目は目隠し手押し車競走と二人三脚が1876年を除いて1868年から1877年まで毎年行われている。また袋競走は、対象年齢、競技形式など競技会ごとに違いが見られるが、毎年行われた。他にも卵を使った競走や油塗りの柱登りなど、様々な種目が競技会ごとに行われた。これらの種目は、英国の祝祭の競技会で行われており、競走や跳躍といった陸上競技種目だけでなく、娯楽の要素が高い種目もポピュラー・スポーツ大会で行われていた。

一方で、投擲種目は行われなかった。大学対抗戦でも投擲種目は第一回大会では採用されていない。この頃の英国の陸上競技大会でも、砲丸が揃わず、砲丸の重量や投げ方など正式なルールが定まっていなかった。

また、英国の祝祭の競技会で行われていた娯楽の要素が高い種目が行われていたものの、女性の参加は本史料の範囲内では確認できなかった。これは英国における「合理的レクリエーション」概念の浸透や女性の身体活動に対する保守的な価値観の移植が、植民地社会においても再生産されていた可能性が考えられる。

競技会運営は、クライストチャーチ市長やカンタベリー州の行政長官が会長や副会長に就任しており、これがこの競技会の権威を象徴している。幹事と会計責任者の要職は同じ人物が複数年務めており、競技会の運営の継続性に貢献していると考えられる。また、競技会を重ねるとともに競技運営の役職が細分化・専門化され、個々の委員の役割が明確になるとともに運営の合理化が進んだ。英国では1880年にAAAが設立され、陸上競技大会の運営について成文化している。この運営形態は、1864年の大学対抗戦以降、アマチュア選手権の運営や各クラブが主催する大会の経験を通して、合理的な運営形態を成立させた。これは、ポピュラー・スポーツ大会においても同様であったと考えられる。

競技会での競技種目には、アマチュアとプロの参加条件を定めている種目が散見された。本稿では、英国の陸上界でのアマチュア問題がクライストチャーチにおいて、どのように作用していたのか、アマチュア規定の運用をどのように行なっていたのかという点について、明らかにすることができなかった。また、種目の選定や運営形態の細分化・専門化の過程についてなどの検討課題も残しており、今後、当時の運営委員に関する記録や委員会の議事録を史料として、検討する必要がある。

Hugginsは本稿の対象時期の英国スポーツについて、次のように指摘している。

スポーツはヴィクトリア朝世界を構成する様々なコミュニティを理解するための鍵となる。新しい都市は、英国の農村の均質な集団で構成された町とは異なっていた。一般的には、都市は小さく、横断できる規模であっても、教区の役割は弱く、無規範で、過密で、富の格差といった要因で、かつて多くの人々が大切にしていた村や町、地域社会の一体感は失われていた。こういった環境の中、スポーツのサブカルチャーは、階級によって分断されることが多かったものの、強いコミュニティ意識と忠誠心を育み、再燃させる一つの手段となった。

スポーツにおける枠組みや忠誠心は複雑で、争いの種となり、矛盾したり、重なり合ったりする可能性がある。学校、職場、通り、町、地域、国家といった現実の、あるいは想像上のコミュニティに

加え、階級、宗教、民族集団も含まれる。スポーツにおけるアイデンティティは、複雑でしばしば変化する地域への忠誠心の網の一部となり、地域への忠誠心はより広範な忠誠心のネットワークの一部となる[34]。

クライストチャーチの人口は、3,205人（1861年）から16,959人（1874年）へとわずか14年で5倍以上となり、急速に都市が建設されていった。こういった変化の中にあって、記念日の競技会は運営の要職を継続して同一人物が務めた。この人事の固定性は、急激な社会変容の只中にあったクライストチャーチにおいて、記念日の競技会を恒久的な都市行事として定着させる制度的基盤となった。クライストチャーチは英国国教会によって建設された都市であったが、記念日の競技会に関する記事からは宗教性を確認できなかった。競技会の種目の変容をみると、ジェントルマン・アマチュアを中心に整備される陸上競技種目を継続して行いながら、英国の農村部の祝祭で行われていた娯楽性の高い種目を取り入れた。以上のことからポピュラー・スポーツ大会は特定の階級や宗教、民族集団[35]といった人々を対象にするのではなく、階層化を目指した入植初期の構想とは裏腹に、多様な階級を包含する「都市の祝祭」として機能したと考えられる。

【付記】
本研究はJSPS科研費 23K10660の助成を受けたものです。

<参考文献一覧>

⊙岡尾恵市『陸上競技のルーツをさぐる』文理閣、1996年。

⊙沢井淳弘『ニュージーランド植民の歴史-イギリス帝国史の一環として-』昭和堂、2003年。

⊙ロバート・W・マーカムソン、川島昭夫・沢辺浩一・中房敏朗・松井良明訳『英国社会の民衆娯楽』、平凡社、1993年。

⊙BIRLEY., Derek, *Sport and the Making of Britain*, Manchester University Press, 1993.

⊙COLLINS., Tony, MARTIN., John, VAMPLEW., Wray, ed. *Encyclopedia of Traditional Sports*, Routledge, 2005.

⊙COLLINS., Tony, *Sport in Capitalist Society A Short History*, Routledge, 2013.

⊙HUGGINS., Mike, *The Victorian and Sport*, Hambledon and London, 2004.

⊙RYAN., Greg and WATSON., Geoff, *Sport and the New Zealanders*: *A History*, Auckland University Press, 2018.

⊙SHEARMAN., Montague, *Athletics and Football*, Longmans Green, 1887.

⊙VINCENT., Geoffrey Thomas, '*Sports, and Other Signs of Civilisation' in Colonial Canterbury, 1850-1890*, PhD diss., University of Canterbury, 2002.

⊙VINCENT., Geoffrey Thomas, Vincent, ''Stupid, Uninteresting and Inhuman' Pedestrianism in Canterbury, 1860-1885', *Sporting Tradition*, Vol. 18, No. 1, Australian Society for Sports History, 2001, pp. 43-55.

34）Huggins, op. cit., pp. 191-192.

35）カンタベリー州にいたニュージーランド先住のマオリは非常に少なく、1874年のセンサスでは約558人だった。当時のマオリの人々はクライストチャーチに住むのではなく、設定された居留地に暮らしており、本稿では検討の対象としなかった（1874年センサス：https://www3.stats.govt.nz/historic_publications/1874-census/1874-results-census.html#idsect2_1_501760：2026年4月13日閲覧）。

A Study of Anniversary Sports Meetings in the Early Years of Christchurch

Evolution of Events and Management of the "Popular Sports" from 1868 to 1877

Masayuki Enomoto

This study clarifies the actual state and transformation of sports activities in the early colonial society of Christchurch, New Zealand, by analyzing the "Popular Sports" meetings held annually on Anniversary Day (December 16). While the Canterbury Association initially aimed to replicate a hierarchical English society, the rapid population growth and shifting social dynamics led to a more democratic and inclusive community.

By analyzing contemporary reports from the Press and the *Lyttelton Times*, this paper examines the transition of competition events and organizational structures between 1868 and 1877. The results show that while the program increasingly incorporated modernized and standardized athletic events influenced by the Amateur Athletic Club (AAC) in England and the later Amateur Athletic Association (AAA) - such as the 100-yard race and the one-mile race - it simultaneously maintained traditional, festive "rural sports" like sack races and wheelbarrow races (blind).

The organizational structure of these meetings became increasingly specialized, similar to the modernization of sports management seen in Britain during the same period. Despite the initial intent to transplant a rigid class system, the Anniversary Day sports meetings functioned as a "urban festival" that fostered a sense of community identity among the diverse inhabitants of the rapidly growing city.